

昆虫における絶滅危惧種情報の収集と保全への活用

神保 宇嗣 (国立科学博物館 動物研究部)

昆虫類は、名前のついている生物の半分以上にあたる 90 万種以上が含まれている非常に多様なグループである。日本は昆虫相の解明が比較的進んでいる地域であり、32,000 以上の種・亜種が知られている。今後研究が進めば、さらに多くの種が記録されていくであろう。

昆虫の絶滅危惧種情報の現状

日本の絶滅の恐れのある野生生物のリストである環境省の「レッドリスト」は見直し作業が進んでいたが、今年（平成 24 年）の 8 月 24 日に「第 4 次レッドリスト」としてその成果が公表された。昆虫類については、以前より詳細な評価が行われ、一つのカテゴリーとして扱われてきた絶滅危惧 I 類が IA 類 (CR) と IB 類 (EN) に区分されるようになった。また、ガ類および甲虫類などの評価が進み、掲載種数が第 3 次リストの 239 種から大幅に増加して 358 種になった。このように、各種の情報が蓄積されるに従い、より実態に即した評価がなされるようになったといえる。

レッドリストが示すように、昆虫類においても、他の生物群と同様に様々な要因によって多くの種が減少傾向にあると考えられる。しかし、レッドリストの見直しを経ても、昆虫類の全既知種に対する掲載種の割合は、他の分類群のそれと比較すると低い傾向にある。その理由の一つとして、種数が多く専門家だけでは現状を把握しきれないことがあげられる。これまで、各地の昆虫類に関する知見の蓄積には、非職業的研究者や愛好家が非常に大きな役割を担ってきた。環境省の自然環境保全基礎調査（種の多様性調査）や各地域の昆虫誌なども、多くが同好会をはじめとする各地の有志によって支えられているのが現状である。その一方で、人気のあるグループや、ある地域にそのグループの専門家がいるかどうかなど、状況によって情報の偏りがどうしてもでてきてしまう。GBIF から公開されている昆虫類の情報であっても、普通種ですら分類群や地域によって情報の偏りがあり、昆虫の多様性の現状評価に必要な個々の種の情報の蓄積は、必ずしも順調に進んではいない。

情報収集の新たなアプローチ

では、今後、情報を蓄積していくにはどのような方法が考えられるだろうか。ここでは二つの可能性を指摘したい。一つは、学会や同好会を核とした情報収集である。その例として、発表者らが行った日本鱗翅学会自然保護委員会での蛾類情報収集パイロットプロジェクトがあげられる。このプロジェクトでは、設定した候補種について各地の学会員に情報提供を依頼するアプローチを試みた（図 1）。提供いただいた情報の一部は、今回のレッドリストの改訂にも役立てられている。もう一つは、広く一般から情報を集める方法である。日本でもチョウやトンボを中心に観察情報を収集するプロジェクトが行われているが、先行するイギリスでは、英国チョウ類保全協会によって、

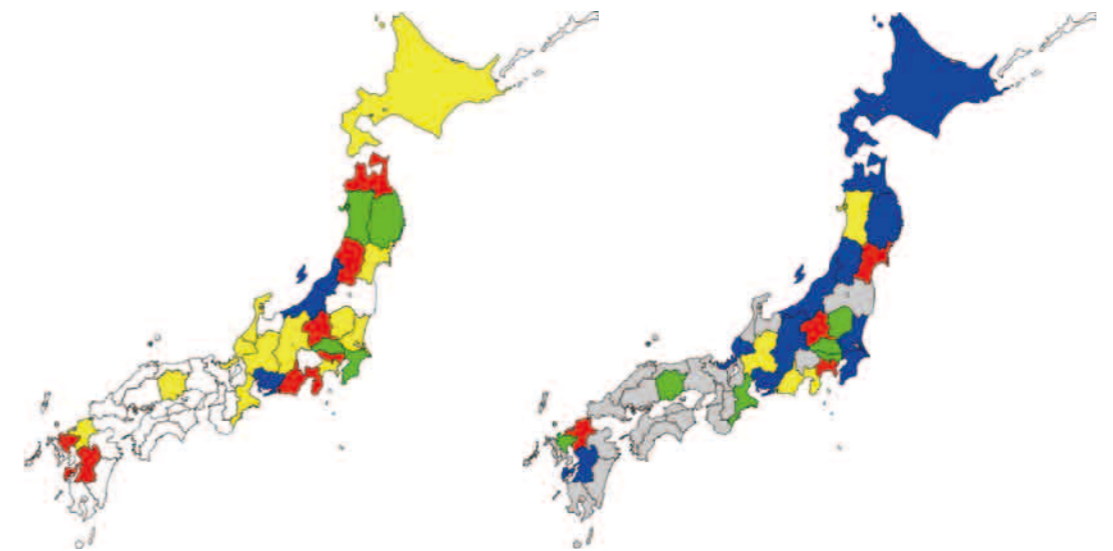


図 1 各地の専門家に依頼して行ったレッドリスト候補種のアンケート調査の結果（日本鱗翅学会自然保護委員会ガ類小委員会，2009）。ハイロボクトウ *Phragmataecia castaneae*（ボクトウガ科、第 4 次レッドリスト準絶滅危惧（NT）新規掲載種）を例に示す。左：県別の確認件数。白：0 件、赤：1 件、黄色：2-5 件、緑：6-10 件、青：11 件以上。右：最後に記録された年。赤：1979 年以前、黄色：1989 年以前、緑：1999 年以前、青：2000 年以降、灰：情報無し。

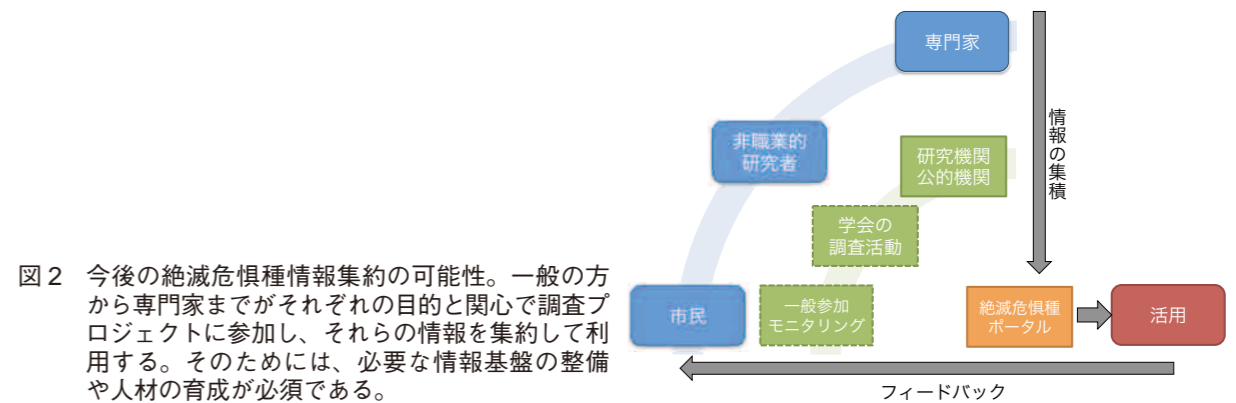


図 2 今後の絶滅危惧種情報集約の可能性。一般の方から専門家までがそれぞれの目的と関心で調査プロジェクトに参加し、それらの情報を集約して利用する。そのためには、必要な情報基盤の整備や人材の育成が必須である。

市民参加型で長期かつ網羅的な調査が行われ、その情報は実際に保全政策に反映されている。専門家によって同定や調査方法などのレクチャーを行うことで、参加者のスキルを担保している点も注目される。

今後の課題

日本でこのようなプロジェクトを進めていくには課題が多い。大きな問題の一つは、行政レベルで行われている一部の調査をのぞけば、調査に必要な資金や、収集したデータを調査グループ内で共有し、調査結果を広く公表するために必要なソフトウェア、今後の利用のために長期間保存するための永続的な保管場所など、情報基盤やそのための人材を確保することが難しいことである。また、調査や同定精度を担保するためのレクチャーも、そのための人材等のキャパシティがあまり大きくないため、実施は限定されてしまっている。これらの状況を一つ一つ改善していくことで、今後のレッドリストの見直しや政策決定などに有用な情報をインプットし、多様性保全に役立てていけると考える。